

## 没(meī)について(四説)

中村雅之

### 1. はじめに

「没(有)」が「mo(you)」ではなく「mei(you)」と発音されるようになったのは19世紀に入ってからのことであると、これまで私は考えてきた<sup>1)</sup>。それは対音資料で確認する限り、エドキンス(Joseph Edkins)の『官話文法』(1857)が「mei」音を記す最も早期の資料であったからである。しかし、対音を伴わない漢字のみの資料(反切など)の中に、「mei」を表示したと解すべき、より古い時期の記述があることに、うかつにも最近になって気付いた。そこで本稿において、これまでの不備を補い、あわせて関連する問題について述べることにした。

### 2. 李汝珍『李氏音鑑』(1805序)

この書の「第二十五問北音入声論」(巻四)において、旧入声字の北京音が網羅的に記されている。その「没」の項には「茫回切音梅又暮賀切」とある。最初の音は「茫回切」という反切によっても、「音梅」という直音によっても、ピンイン表記の「mei」に相当する音を意図したものと理解してよい。反切を素直に帰納すれば[muəi]と音声化されるが、北京語においては声母/m/の後では音韻論的に開合の対立がない。第二の音「暮賀切」は、ピンイン表記の「mo」に相当するものであろう。

### 3. 張自烈『正字通』(1670序)<sup>2)</sup>

「没」字の解説(中国工人出版社1997年版578頁)の末尾に「没北音読平声如摩灰非」とある。「摩灰」という反切から導かれる音は、やはりピンイン表記の「mei」に相当するものと考えるのが妥当であろう。ここで「没」の北音「mei」を紹介しているのは、それが「非」であることを述べるためである。つまり『正字通』の著者は「正しくない音」あるいは「耳障りな音」として北音(北京音)の「mei」を捉えていることになる。

なお、この書は1670年代に廖文英の名を冠して出版されたが、実際の著者が張自烈であることは現在では一般に了解されている。張氏がこの書を完成させたのがいつであったかについては明らかでないが、1650年代の半ばには『字彙辯』の名で一度出版されたという。

---

1) cf. 中村雅之(2004)「没(meī)の成立について」、「没(meī)について(補説)」、「没(meī)について(三説)」『KOTONOHA』第15、17、20号。

2) 書名および著者名についての詳細な議論は、古屋昭弘(1993)「張自烈と『字彙辯』——『正字通』の成書過程——」『東洋学報』第74巻第3・4号を参照。

また、張氏は1630年代に二度ほど北京を訪れている。(以上、古屋1993による) したがって、「没」の北京音「mei」については、『正字通』刊行時よりもかなり遡った時期、すなわち張氏が北京を訪問した1630年代の状況を反映するものと考えられるべきである。

#### 4. 「没mei」の背景

清朝における北京語が支配者層たる満洲人の言語(満洲語)の影響を強く受けているという指摘は、幾度となくなされてきた。そのような北京語は「京話」「旗人語」あるいは「満式漢語」などと称されることがある。そして「没mei」についても、そのような満洲語的な北京語の特徴の一つとされたことがあった<sup>3)</sup>。しかし、満洲人たちがこぞって北京に流入する1640年代より前に、「mei」がすでに北京語に存在したことが『正字通』の記述から明らかである以上、そのような論が成立する可能性は極めて小さい。

「没mei」成立の背景としては、清朝の満洲人という狭い枠に限定するよりも、満洲人の前身たる女真人のほか、契丹人やモンゴル人をも含む北方の民、いわゆるアルタイ系の諸民族を視野に入れるべきなのであろう。それらの民族の言語は、語頭に強勢を置くという共通した特徴を有していたと推測される。そのために、彼らが漢語を獲得した際にも、その漢語において語頭強勢という、南方の漢語にはない特徴が付与されるようになった。16世紀初頭のハングル表記にはすでに軽声の表示が頻繁に見られるが<sup>4)</sup>、北方における軽声の発達も語頭強勢と表裏一体の現象である。そして「mei」についても、「没有(moyou)」という語から、その「強+弱」という北方的な構造の故に、縮約によって形成されたと考えるべきであり、モンゴル語や女真語などとの言語接触の産物ということができるのである。

#### 5. 「没mei」の性格

17世紀前半にすでに「没mei」が成立していたにもかかわらず、清代の満洲文字資料の中に「没」を「mei」と記したものはない。「mu」または「mo」というのが「没」に対する表記である。このことは『正字通』のように「mei」を卑俗な音として退ける傾向が、北方の旗人たちの間にもあったことを示している。これは副詞「還」が満洲文字資料で「hai」ではなく「huan」と表記され続けたのと軌を一にする。「還」が16世紀北方で「hai」と発音されていたことは崔世珍の『老朴集覽』「単字解」の記述で明らかである。北京語が影響力を増した19世紀以降になって、やっと「没mei」や「還hai」が認知され、対音資料にも表記されるようになるわけである。

---

3) cf. 浅井澄民(2005)「否定詞[mei](没)の来源——満式漢語“没有”合音説」『中国語学』252号。

4) cf. 中村雅之(2006)「翻訳老乞大・朴通事の軽声について」『KOTONOHA』第43号。